

クリスマス礼拝を先週終えて、私たちはイエスが既にご降誕されたことを祝ったのですが、本日の聖書箇所は、東方からやって来た占星術の学者たちがベツレヘムに生まれたイエスを拝みに来たという物語です。時間的な経過としては、イエスの降誕があった後に起こった出来事を伝えていきます。学者たちはエルサレムに来て「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」と言ったのでした。彼ら学者たちは異国の占星術の学者たちです。ですから、ユダヤ地方の政治的な戦力図などに関する知識があるはずもなく、ユダヤ人の王としてお生まれになった人物が、時の権力者であるヘロデからどのような迫害に遭うかということにも無頓着だったので、エルサレムでイエスの誕生した場所を聞くという間違いを犯してしまったのです。そのことで何が起こったのか。

まず最初に、当時のユダヤ地方を支配していたヘロデ王が学者たちの話を聞いて不安を抱きます。そこでヘロデ王は民の祭司長たちや律法学者たちを集めてメシアはどこに生まれることになっているかと問いただしたのでした。そこで、旧約聖書の預言ではベツレヘムに生まれることになっているということが判明します。

次にヘロデ王は占星術の学者たちをひそかに呼んで、メシアを示す星の現れた時期を確認し、メシアである幼子を見つけたら教えてほしいと学者たちに依頼します。その理由は、メシアを自分も拝みに行きたいからだというのでした。

そして、幼子のいる場所の上で星が止まったので、学者たちはイエスに会うことができ、ひれ伏してイエスを拝み、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげたのでした。ところが、彼ら学者たちは夢でヘロデのところへ帰るなどのお告げを受けたので、別の道を通って自分たちの国に帰っていったのでした。ここまでが本日の聖書テキストです。

占星術の学者たちがイエス誕生の知らせを携えて東方からはるばるやって来たのです。ユダヤ地方からみて東方というのはバビロンやペルシアですが、ここは依然ユダヤ人たちが強制的に連行されて捕囚されていた場所ですから、そこには何らかの聖書の言い伝えが伝えられ、残っていたのかもしれませんが。本来、占星術の学者が旧約聖書の預言するメシアに関して関心を抱くはずもないことです。けれども、マタイ福音書の降誕物語は、本来関心を抱くはずのない異国の学者たちがメシアの誕生を喜び祝うために、長くて危険な旅をして来てまでもイエスの誕生を見届けに来たことに大きな喜びあることを読者に知らせているのです。

さて、学者たちは幼子イエスに出会うと、聖家族にひれ伏して幼子を礼拝し、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげたということです。黄金や乳香や没薬は旅を始めた時からメシアに贈呈するために持ってきたものではありません。おそらく、彼ら占星術のおまじないの道具だったのでしょう。乳香は焼香のように火を起こした炭に直接小さく砕いたものをくべて、立ち上る様子や匂いを用いて占って

た道具であろうと思われる。没薬も占いに用いるもので、黄金も何らかの形で占星術の占いに用いていたのではないかと思われる。つまり、占星術の学者たちは、救い主イエスに出逢ったことで、それまでの占星術の仕事を辞めたのではないか。彼ら占星術の学者たちは、救い主イエスに出会うことで、イスラエルの伝統的なメシアに対する期待感など持ち合わせていないにもかかわらず、救い主イエス・キリストを知ること、自分たちもまた神の子であるということを知ったのです。だから、自分たちにとって必要不可欠であった、黄金、乳香、没薬をイエスにささげたのです。それは同時に運命判断や占いによって自分の生き方を決めるような運命論的な生き方との決別でもあったのです。

その後の物語の続きは、主の天使が夢でヨセフに現れて、幼子と母マリヤを連れてエジプトに逃れなさいと言われたので、夜のうちに聖家族はエジプトへ避難したのでした。ユダヤ人の王となると予言されているメシアを見つけ出して殺そうと企んでいたヘロデ王は、イエスを特定できなかったため、ベツレヘム周辺の2歳以下の男の子を一人残らず殺すという非道なことをしたのでした。

そして、ヘロデ王が死ぬと、再び主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れ、ヘロデによる殺害の危険が去ったので、子どもとマリヤを連れてイスラエルの地に戻るように言われます。けれども、ヘロデ王の子であるアルケラオが父の後を継いでユダヤ地方を支配していたので、ヨセフはガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に隠れ住んだのでした。

クリスマスの説教でも語ったのですが、ベツレヘム周辺の2歳以下の男の子が皆殺しになったという話はヨセフとマリヤも当然聞き及んでいたことでしょうし、それは後にナザレで成長していくイエスにも両親から語られた悲しい出来事だったはず。イエスはご自分が神の意志を体現していく生活を模索していく中で、この悲惨な出来事にご自分の存在が関与していることを認識するようになったのではないかと思われる。そして、この意識が悲しむ者と共に悲しむ、慰めを必要とする存在をどこまでもいつくしむ思いとなって結実していった、最終的に十字架の死を神の意志として受け入れることへと向かわせたのではないかと思わされるのです。

占星術の学者たちは救い主イエスに出会ったことで、占星術を生業にする生き方から一大転換を果たしたのです。彼らが別の道を通して自分たちの国へ帰った後のことは聖書には何も書かれていません。イエスもまた、ご自分がこの世に生を受けたことで多くの幼子が殺されたことで、神の意志をどのようにすれば体現できるかを考え抜いたと思います。だから、イスカリオテのユダに裏切られても赦すことができたし、ペトロの否認に出逢っても彼をとがめることはなかったのです。イエスもまた、ご自分が神の子として生かされていることを心底信じていたので、人生をどのような形で終えようとも、そこには神の意志が働いているということ信じ切ったのです。

私たちも、この一年の信仰生活を締めくくるに際して、神の子として生かされてきた歩みを振り返りつつ、新たな年もまた、神の子として歩んでいくことを心に誓いたいと思います。